

北京日本学研究中心合同研究会報告

目 次

北京日本学研究中心合同研究会について……………	大矢根 淳 ……	1
日本における複雑系経済学の展開 — マルチエージェントベースの経済学を中心に……………	吉田 雅明 ……	5
哲学における複雑系……………	金子 洋之 ……	12
「複雑系社会学」の可能性 —— 相互行為と社会システム論から ——……………	嶋根 克己 ……	17
編集後記……………		23

北京日本学研究中心合同研究会について

大矢根 淳

2005年度春季合宿研究会の一環として、3月16日（水）夕方、専修大学社会科学研究所有志と北京日本学研究中心社会経済研究室との合同研究会が開催され、専大社研からは吉田雅明所員（経済学部）はじめ金子洋之所員（文学部）、嶋根克己所員（文学部）の三人が登壇し、また北京日本学研究中心からは修士課程二年生4人が報告を行った。

北京日本学研究中心は北京外国語大学キャンパス内に開学する大学院大学である。1972年の日中国交正常化・第1次日本語ブーム以降、多くの大学で日本語教育が開始され、1980年、当時の大平首相の提唱で日中両国間政府の合意に基づく「在中国日本語研修センター」（通称「大平学校」）が設立されて中国国内の大学日本語教師の再教育が実施されてきたが、その後それが発展的に解消されて「北京日本学研究中心」が設立され、日本語教師の再教育と大学院修士課



(撮影：大矢根淳)

程の院生教育が平行して実施されるようになった。これまで多くの修士課程修了者、博士課程修了者、学位取得者を輩出し、中国における日本研究の中心的な役割を担っている。センターの修了生・卒業生は現在、中国各地の日本語教師として活躍しているほか、北京・上海をはじめとする社会科学院あるいは中国全土

の大学の教授陣として活躍している。北京日本学研究中心は2005年秋に、創立20周年を迎え、記念の国際シンポジウムが開催された。

今回の専大社研と中国社会科学院共催の国際シンポジウム「中国経済与社会協調発展学術検討会」の企画・運営の実質的な中心として活躍した中国社会科学院の李国慶氏は、この北京日本学研究中心の出身で、東京大学（修士）・慶應義塾大学（博士）で学位を取得して帰国し、中国社科院・都市発展与環境研究中心で活躍する一方、北京日本学研究中心には講師としても関わっていて、その関係で、今回の国際シンポジウムの通訳には北京日本学研究中心の教授陣も参加してくれた。

おりしも、大矢根淳所員（文学部）が今年度、北京日本学研究中心の派遣教授（派遣専門家）として北京に赴任（2月末～7月中旬）していたことで、中国社科院・李国慶氏、北京日本学研究中心・宋金文氏、専大社研・大矢根の三名によって国際シンポジウムの報告レジュメの翻訳作業等が進められ、それらの作業過程で、専大社研と北京日本学研究中心の合同研究会開催の可能性が相談されてきた。しかしながら、専大社研の北京滞在日程はかなりたて込んでいたこと、それも中国社科院の特段の配慮で北京各地の視察・調査が綿密に企画されていたことで、専大社研フルメンバーが参加しての北京日本学研究中心との合同研究会開催は難しかったので、公的視察・調査等の日程が一段落する3月16日夕方から、専大有志を募って研究会開催が計画された。

中国社科院との国際シンポジウムは、社会・経済・経営等の諸分野の報告が重ねられたので、こちら北京日本学研究中心との合同研究会では異なる領域・テーマで企画が練られた。専大社研メンバーの中から、吉田所員ら数名が「複雑系社会理論」をテーマとして報告してくれる旨

申し出があり、北京日本学研究中心側と協議の結果、これがテーマに採択された。吉田所員らは2003年3月、専大社研社会科学叢書『複雑系社会理論の新地平』（専修大学出版社）を上梓しており、その執筆陣の中から、吉田所員が進化経済学の領域から、金子所員が哲学の領域から、嶋根所員が社会学の領域から報告を行った。

また、この共同研究会では、北京日本学研究中心側から修士課程二年に在籍する院生4名が、各自の研究計画書の概要を発表した。彼らは数日後に東京大学をはじめとする日本の大学院への留学出発を控えており、その意味では第一線の社会学者を前に日本語で各自の研究計画書を披露する、いわば度胸試しの場ともなった。みな、素晴らしい日本語力で堂々と各自の研究計画を披露し議論した。

さて、このような経緯・雰囲気でご企画・実施された専大社研有志－北京日本学研究中心の合同研究会は以下のように進められた。会場は北京日本学研究中心4階403室、午後5時～7時。

1. 竹内信夫・北京日本学研究中心日方主任教授挨拶
2. 柴田弘捷・専大社研所長挨拶、記念品贈呈
3. 専大社研「複雑系社会理論の新展開」に関する報告および質疑
 - ①吉田雅明：「日本における進化経済学の展開～マルチエージェントベースの経済学を中心に」
 - ②金子洋之：「哲学における複雑系」
 - ③嶋根克己：『信頼』から『友好関係』へ～相互行為と社会構造」
4. 北京日本学研究中心・修論研究計画報告
 - ①張 域：「公的信用保証制度のリスク管理について」
 - ②郝 秋香：「地方住民の生活世界から見る地方の価値と地域活性化～移住者の生活史を中心に」
 - ③周 書林：「ジョブ・ローテーションと昇進昇格との関係性～ブルーカラーのキャリア考察を通して」
 - ④何 環：「コミュニティメディアとコミュニティの生成～日本の市民パブリック・アクセス活動の考察から」

合同研究会終了後、大学キャンパス内のレストランで懇親会が開催された。参与をはじめ専大社研有志、北京日本学研究中心修士課程1・2年の院生、教授・助教授陣、会場運営等でご尽力いただいた職員の方々総勢40名弱が和やかに盛大に夕食を共にして語り合った。

さてその後日談。帰国した専大社研有志のもとに東京大学大学院に留学中の郝秋香さん、何環さんから挨拶の連絡があったことが契機となり、嶋根ゼミ（文学部）との「国際交流セミナー」（専大国際交流センター共催）が実現し、専大学生・院生・留学生との交流が行われた。双方

の学生・院生にとってとても刺激的な研究会になったと聞いている。その模様は『ニュース専修』に掲載され、中国・北京の北京日本学研究中心にもその記事は届けられ、資料室に配架された。

日本における複雑系経済学の展開

－ マルチエージェントベースの経済学を中心に

吉田 雅明

0. はじめに 「複雑系ブーム」の話から

1996年ですから、もう今から10年近く前のことですが、日本では「複雑系」研究のちょっとしたブームが起きました。そのきっかけは、ワールドロップの『複雑系』が翻訳されたことや『ダイヤモンド』というビジネスマン向けの週刊誌で「複雑系研究」が特集されたことだったと思います。ワールドロップという人は科学ジャーナリストで、その本で、アメリカのサンタフェ研究所での、コンピュータ科学・物理学・経済学などいろいろな分野の研究者の交流から生まれた学際的な研究を紹介しました。異なる分野の研究者が、自分の分野の枠にとらわれず自由に議論する様子は、とてもうらやましく思えたものです。ああいう楽しそうなのを純粋に非自然科学系でやってみようよ、ということで私たちの共同研究がスタートしたのもこの時期です。

ところでブームというと、何か新しい話が出て、沢山の人がそれに飛びついただけという感じがしますよね。「複雑系」の場合も、セルオートマトンで生命現象、ポジティブフィードバックを仕込んだ先行独り勝ち経済モデル、乱流に砂山形成・・・といった鮮やかなシミュレーションは、多くの読者にとっては、その目新しさの故に魅力的に見えたことでしょうし、実際のところ「複雑系」関連書の書き手の方でも、たとえばカオスの話をもともとほとんど必然性のないネタに比喻としてくっつけただけ、というのも数多く見られました。まあ、こういうのが現れるから「ブーム」といえるのでしょうか、それだけだと時間が経ったたら何も残りません。

そこで問題は、何が残ったのか、ということになりますが、これは「複雑系」の捉え方と深く関わってきます。といいますのは、ブームの時期には「複雑系とは何か」という解説書もたくさん書かれ、複雑系研究の名の下に行われている様々なアプローチが紹介されていましたが、そうした書物で紹介される様々なトピックを見れば見るほど、複雑系とは何であるのかわけがわからなくなってしまうのです。かろうじていえることは、どうやら構成的手法が重要な、コンピュータ・シミュレーションが成果実現の鍵らしい、くらいのことで、それで何がしたいのか、何ができるようになったのか、焦点はぼやけるばかりです。これでは何も残りません。その原因は何かというと、多岐にわたる研究事例やツールだけを追いかけて、何のために「複雑系」という問題を立てようとしたのか、大切な元のところを見ていないからです。

そもそも「複雑系」というのは「システム」の捉え方についての問いかけでした。これは決

して 90 年代のサンタフェ研で突発的に開花したものではありません。ウィーバーが 20 世紀後半のフロンティアは多数の主体が複雑に干渉しあって統計力学だけでは処理できないようなシステムの研究だと言ったのが 1948 年のこと。これはちょっと早すぎた声明といえるかもしれませんが、物理学でのプリゴジンやハーケン、社会学でのルーマン、経済学ではサイモンや社会主義計算論争などなど、それぞれの切り口で「複雑系」に立ち向かっていった歴史があるのです。そして特に「複雑系経済学」という形では、日本では 80 年代に塩沢由典さんが新古典派経済学批判から議論をされていました。

こうした研究はブームがなくても展開していったはずですが、ブーム自体の実質的な効果は何もなかったかという点を決してそんなことはありません。「複雑系」をキーワードにした話題の広がりや人と人を結びつける上でとても大きな力を持ちました。私たちの共同研究でも、もともとはそれぞれの研究分野の作法を窮屈に思っ、また、それぞれの分野では異端と見なされるようなことを、孤独にやっていたのですが、このブームのおかげで、同じような変わり者は結構いる、とお互いの存在に気づいたのは大きかったと思います。そして問題が共通の形式を持つ場合はツールに関して融通ができますし、なにより同志がいるということは心強いことです。社研の特別研究の成果として出版した本には、経済学から社会学、論理学に文学にいたるまで、それまでだったらありえないようなコラボレーションが反映されることになりました。

1. なぜ既存の経済学ではイヤなのか

さて、私のパートは経済学ですので、経済学に焦点を絞って日本の「複雑系」研究周辺の事情をお話ししなければなりません。日本では前年の準備会を経て、1997 年に進化経済学会が発足しました。毎年秋に 1 日のコンファレンス、春に 2 日間の本大会があり、2005 年の大会は東京工業大学で第 9 回目、次は北海道大で第 10 回目の大会があります。この学会の特徴は、これまで経済学が与件としていた嗜好・制度・認識の枠組みが時間経路の中でいかにして形成されたか、とか、巨大複雑な経済システムの中で認識能力・情報処理能力・環境への作用範囲のすべてにおいて限界を持つ人間はいかに振る舞うのか、またその振る舞いはシステムをどのように支えているのか、といった問題に対して、経済学の従来のフレームワークを積極的に離れてアプローチしよう、というところにあります。このようなテーマに賛同して集まっている人たちも様々で、制度学派、レギュレーション学派、ポストケインジアンから経済物理やシステム工学までいて、アプローチの仕方も実に多様です。そこで今日は、その中で私が関わっているものとして、マルチエージェントベースの経済学の紹介をさせていただきたいと思います。

マルチエージェントベースの経済学というのは、そのまま読むとマルチが「多数の」で、エー

ジェントが「主体」で、多数の主体を基礎にした経済学、となりますが、これだと普通の経済学との違いがわかりませんね。その特徴を簡単に言えば、

M1) 比較的簡単な定型行動によって経済主体の行動をモデル化する

M2) 多数の主体行動から完全にボトムアップに社会モデルを構築する

ということになります。これを経済学の中で主流をなしている新古典派経済学と比べるならば、そちらは、

N1) 主体行動を制約条件付きの最適化行動としてモデル化する

N2) 主体の意思決定が相互に整合的となる状態によって定義される均衡を社会モデルの基礎とする

ということになります。主体行動は最適化じゃないし、市場均衡も前提にしないので、新古典派経済学とは全く基本設計が違っていることがわかれると思います。だから普通の経済学者からは、行動モデルが最適化でないし、市場モデルも均衡に立脚していなし、そんなのはアドホックでなんでもありになるから、せいぜいただの現象論どまりで体系的な科学にはなりえない、なんていわれてハナから相手にしてもらえないのですが、マルチエージェントベースの経済学を志す者にとって、この基本設計は、経済社会のモデルを構築する上でどうしても譲れないとても大きな意味を持っているのです。

経済学もそうですが、モデルを扱う科学は、対象のモデル化にともなって必然的に単純化が行われます。つまりその科学の基本設計を決めた人が本質的だと思ったところだけをできるだけクリアに表現し、あとは捨象してしまいます。経済学の場合、競争による合理的な秩序、というのが目玉になっているのだと思います。そのクリアな表現として先の(N1)と(N2)があるわけですが、これによってどうしても捨象されてしまうものがあります。

たとえば、「合理性」というのが何を意味するか。人はできれば合理的でありたいと願うでしょう。でもその際の「合理的である」という意味は、せいぜい「その選択が納得できる」程度の意味であって、すべての可能な選択肢の中から最善のものを選ぶ、というものではないと思います。そもそも可能な選択肢の数と決定に要する計算量は、商品の数に対して指数関数のペースで増えてしまうので、スパコンが頭に接続されてたって最適化計算というのは実行不可能です。でも通常の経済学ではそうした最適化を前提とします。それだけでなく、これだけ大変な最適化計算の結果としてのそれぞれの商品の需要量・供給量に不一致があれば、それまでの苦労はなかったことにして、価格を変えて最初からやり直しになります。それでなんとかうまくいったところを一般均衡と呼び、これを経済社会を解釈するためのベースにするわけです。経済学のトレーニングを積まない限り、こうした展開に普通はあまり共感しないと思うのですが、「ちゃんと競争が働いていてよけいな規制がなければ市場均衡は実現するのだから、いらんこ

とを考えずに均衡成立の先を議論した方が生産的だろ？」と諭されたり、「相手を説得しなければ相手と同じ土俵に立って議論をしなけりゃだめじゃない」なんて叱られたり、これじゃ経済学の論文かけないしなあなどと弱気になったりしているうちに、経済学の躰が体に染みついて、経済学のもの考え方がいつしか自然なことのように思えてくるから不思議です。つい愚痴が出てしまいましたが、本当に競争が働いて、規制がなかったら市場均衡に至るかという、それは無理だと思うのです。もちろん「市場の失敗」とか経済学の応用問題として行儀よく納められているようなありきたりの問題もありますが、なによりも違和感を覚えるのは、いろいろやっているうちに市場均衡に近づくためには、いろいろやるための環境がいろいろやっても変わらないことが保証されていないといけない点です。つまり、判断・行為が繰り返し可能という前提があり、そこには私たちの日常のような不可逆的な時間は流れていないわけですから、先ほどの話に戻しますと、経済学流の単純化の犠牲になって、時間は捨象されてしまうのです。

こんな次第で、経済主体の能力の有限性、経済社会のシステムとしての巨大さ、複雑さ、時間の不可逆性を捨象してしまう経済学の基本設計は、「繰り返せない時間の中で、きちんとやろうと思ったってなかなかできない人間が、結構いい加減に、ときどきすごく理不尽な意思決定をして行動しているのに、なんでこの巨大な経済システムはどうか動いているのだろう」という驚きから出発して経済社会のモデルを考えようとするとき、どうしても呑めなくなってしまうのです。経済学の躰が染みついていたら、どんな場合も最適化一般均衡をベンチマークに考え、それからの隔たりを考察しよう、というふうにはできるのですが、ありえないものとの距離を定義することなんかに関心がなくて、それより眼前の複雑巨大な経済社会システムがどう動くのか、そのメカニズムを知りたいということに関心を持つなら、当然にその関心に適合的な社会モデルの基本設計を採用すべきです。その第一歩が (M1) と (M2) なのです。

2. マルチエージェントベースの経済学とは

では、マルチエージェントベースの経済学とはどういうものか、続けて説明しましょう。

先ほど、最適化というのは実行不可能で、人間のモデルとして「合理的であること」はせいぜい「選択が納得できるかどうか」くらいの意味しかもちえない、と言いましたが、(M1)はこの点をふまえての主体行動のモデル化です。簡単な定型行動、と書きましたが、典型的なモデルとしては H.A.サイモンの「満足化原理」があります。満足化原理に従う行動というのは、主体に何らかの刺激が与えられるとき、それがその主体の満足化基準値を超えていたら、ある一定パターンの出力を行う、というルールもしくはこの形式のルールの組み合わせで表現できる定型的行動、ということです。いくつか具体例を挙げますと、

入力刺激	満足化基準	出力 ON
①提示された商品	自らの購入基準を上回ること	購入する
②売上高	費用+正常マークアップ分を上回ること	生産量を上方調整
③今月の手取り	先月の手取りを上回ること	消費額を上方調整
④月末在庫数	正常在庫範囲の下限を下回ること	仕入れ先に発注

.....

といったもので、私たちの日常生活で行われているごく普通の行動であることがわかるでしょう。主体のモデル化にあたって、満足化基準は外生変数とします。主体行動のモデリングの仕方として、ここに違和感を覚えられるかもしれません。行動基準を外生変数扱いしているのは、赤ん坊のようにまっさらな頭でこれから行動基準を身につけていこうという主体を想定しているのではなくて、すでに存在し動作している社会の中で、店主とか製造業者とか、すでに役割を持っている主体を描こうとしているからです。もちろん各主体の行動基準は環境の中で変わっていくでしょうが、それは学習モデルを追加する段階で考慮すればよいので、第一次近似としては外生変数として与えて、システムの振舞いの分析に進もうというわけです。

一方、満足化基準が少なくとも初期値としては外生変数であるということは、不可逆的時間下・システム非平衡状態での、主体の自律分散的行動を可能にするためにとても大きな意味を持っています。つまり、それぞれの主体がシステムの平衡状態から離れて自律的に行動してしまうためには、自前の行動の参照基準を持っていなければ動きようがないので、その意味では、満足化基準を外生的に与えることは、主体の自律分散行動をシステムとして認めようとした場合の理論としての要請でもあるのです。これはすべての財の需要と供給が一致する状態を定めるために、各価格ベクトルに対して各人が需要量・供給量を一意に反応するよう、主体行動モデルとして最適化が要請されているのと、考えてみれば同じなのかもしれません。

なお、こういうのを主体一人一人について作っていたのでは埒があかないので、行動パターンをグループ化してまとめるという単純化を行います。その上で、(M2) のアセンブルの作業があるのですが、これはもう完全にボトムアップに行われます。マルチエージェントベースと云ったら、普通はこの社会モデルのボトムアップな構築手法の方が強調されますが、大切なのは手法やツールよりも既存の経済学に対して何を訴えたいかである、というのが複雑系を考える上での基本スタンスですので、今日は (M1) に重点を置いた紹介になっています。

その組み立て方ですが、定型行動をとる主体は、自分の身近なところの他の主体の行動を入力刺激とし、刺激の大きさの加重和と満足化基準の比較で自分の出力、つまり、調整行動を起こすかどうか決定します。この主体の行動を入力刺激の一部として受け取る他の主体もいるわけですから、ここから主体の満足化行動を基盤とした相互作用系が現れてきます。ただし相互

作用といっても、それはリジッドな、つまり通常の経済学のように各主体行動が価格というグローバルな変数を媒介にして打てば響くように結合した系ではなくて、個々の主体が参照するのはあくまでもローカルな範囲のローカルな変数ですし、それぞれの入出力にはラグがありますので、ルーズな結合系でじわっと浸透するような相互作用系です。ともあれマルチエージェントベースの経済学の基本方程式を書いてみると次のようになります。

$$X_j(t+1) = A_j \cdot F_j(\sum w_{ji} X_i(t) - S_j + Z_j(t), B_j)$$

$X_j(t)$ t 期の第 j グループの調整出力

w_{ji} 第 j グループの入力として第 i グループの出力を評価する際のウェイト

S_j 第 j グループの満足化平均基準

A_j 最大調整量パラメータ

$F_j(\cdot, B_j)$ 最大・最小値を ± 1 とするシグモイド関数

ただし、入力値の絶対値が B_j 以下のときは出力値 0

なんだかそっけないですが、これが (M1)・(M2) をベースに経済システムを表現するときの出発点です。最後の B という変数はバッファを表し、満足化基準に幅をもたせています。 Z はシステム外部からの刺激を表しており、これは政策モデルにおける政策変数などにあたります。なお、グループを消費財生産部門企業家群と給与所得家計の 2 つだけにした特殊ケースが乗数過程になります。

次の問題はこのような経済システムはどのように振舞うか、ということになりますが、これは単層相互結合型のニューラルネットと同じ形ですので、バッファの幅を 0 にとってやっても、外部刺激が一定であれば、主体の出力値の初期値に応じて収束先がいくつかに分かれる多平衡システムになります。平衡、といっても経済学で言うところの均衡とはもちろん含意は違います。それぞれの主体グループとしては活動状態が安定している組み合わせがいくつかあるわけですが、そのパターンで各グループが一定水準で活動を続けている単純再生産状態と考えて方が近いと思います。ただし、それは平衡条件を主体に天下り式に押しつけて得られる状態ではなく、平衡を前提とせず、不可逆的時間の中での主体の実行される行為の相互作用から整合的に積み上げられた状態です。

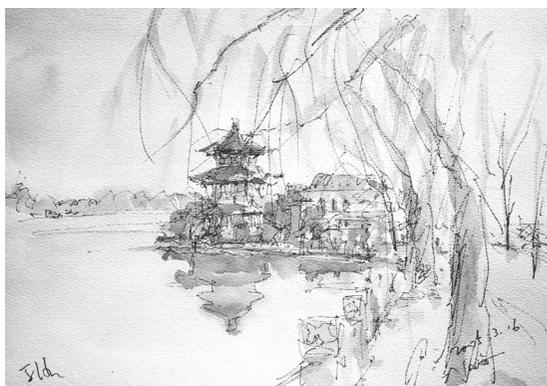
今回は省略しますが、これを出発点にしていかに経済社会モデルを作り込んでいくか、数多いパラメータをどうやって実際の社会のデータに設置させるかが、マルチエージェントベースの社会モデルに携わる者の腕の見せ所となります。

3. 社会科学を組み立てる新しい考え方と複雑系経済学のこれから

最後に、マルチエージェントベースの経済学を考えることの意味について触れておきましょう

う。途中で、(たとえ望んだとしても)最適化なんて実行できない人間が構成している経済システムなのにどうしてなんとか動いているのだろう、と言いましたが、こうした社会の捉え方は社会システムにとっての合理性の意味の反省へとつながります。「合理的である」ということは、せいぜいが「まあ納得できる」「目をつぶっておける」くらいの意味しか、この巨大複雑な社会システムの中では実際上持ち得ません。社会がある状態で安定的に活動していたとしても、それをパレート最適状態として理解してしまう経済学の「ものわりの良さ」に、私はずっと違和感を抱いてきました。紹介させていただいたのは、もっとざらざらした、理不尽な状態を、もっと素直にモデル化できないか、という問いに対する私なりの答です。

ただマルチエージェントベースの経済学を社会工学として一人前のものにするためには、これをどうやって現実のデータとすりあわせてやるかという問題を解決しなければなりません。現在、ローカルなシミュレーション、たとえば大病院のSARS防疫システムの研究とか地域通貨の流通モデルなどは進展していますが、これを経済システム全体を扱う学として成立させるためには乗り越えなければならない技術的なハードルがまだまだあります。最初に紹介しました進化経済学会でも、どうすれば実証研究として軌道に乗せられるかがホットな話題になっています。次の機会がありましたら、もっと先の地点での展望をご紹介できるよう、頑張りたいと思います。



研究会当日の朝、後海のほとりで

哲学における複雑系

金子 洋之

私の専門は哲学なので、その観点から、複雑系の提起する問題が哲学においてどのような意義をもつか、ということをごく簡単にお話したいと思います。

実を言えば、複雑系の発想は、哲学的イマジネーションを誘発するらしく、これを論じた哲学の文献はけっこうたくさんあります。しかし、そのような「哲学的」と称される多くの議論は、複雑系の理論を単に比喻として使ったり、創発性という概念に頼って問題を回避したりするものが多く、こういうやり方では、複雑系の諸概念や理論の解明に貢献するとは考えられません。もちろん、私の話にもアナロジーがないわけではないし、それが直接複雑系理論の何らかの理解につながるかどうか、はっきりしない部分も数多くあります。しかしながら、哲学の方法が現実に使われている概念の分析やそれら概念の間のつながりを明らかにすることにあるとすれば、そのような観点から複雑系について何が言えるか、こちらの方が重要だと私は考えています。そこで、この観点から二つの話題を紹介したいと思います。

最初の話題は、『複雑系社会理論の新地平』という共同研究の中で取り上げた「信念改訂」の問題です¹。信念改訂の理論というのは、次のような現象を説明する理論です。

いま、「ファイドーは鳥である」という情報が与えられているとします。さらに、われわれは素朴にも「すべての鳥は飛ぶ」と信じているとします。このとき、「ファイドーは飛ぶ」と推論することは論理的に妥当です。すなわち、

ファイドーは鳥である。

すべての鳥は飛ぶ。

ゆえに、ファイドーは飛ぶ。

は論理的に妥当な推論になっています。ところが、いま、「ファイドーは南極に住んでいる」とか、あるいはもっと露骨に「ファイドーは飛ばない」という情報が与えられたとします。この場合、われわれはどうするでしょうか。前者の情報の下では、そこから「ファイドーはたぶんペンギンであり、ペンギンは飛ばない」と推測するようなメカニズムが付け加わるので、ここ

¹ ここで「信念」というのは、英語の **Belief** の翻訳です。英語の「belief」と日本語の「信念」は、意味的にはまったく同じというわけではありません。ここでの「信念」は単に「そう思っていること」とか「そう考えていること」として理解する方が適切だと思います。

では話を簡単にするために、後者「ファイドーは飛ばない」という情報が加わったとします。すると、われわれは自らの信念全体を矛盾なく保持するために、これらの信念のどれかをキャンセルしなくてはなりません。そのための選択肢はいくつか考えられます。例えば、この場合であれば、

- (1) 後から加わった情報「ファイドーは飛ばない」をキャンセルする。
- (2) 「ファイドーは鳥である」をキャンセルする。
- (3) 「すべての鳥は飛ぶ」をキャンセルする。

といった選択肢が考えられます。いずれにせよ、われわれはこうした作業を行って、自分の信念体系の整合性を確保しようとするでしょう。新たな情報を前にしたとき、この整合性の確保をどのようなメカニズムに基づいて行うか、あるいは実際に整合性を確保したときに、そこにどのようなメカニズムが働いているか、を明らかにする理論が「信念改訂」の理論と呼ばれる理論なのです。

ここで二つコメントを付け加えます。まず、この信念改訂理論は、心理学的な研究をしているのではないということです。人間は、こういう状況下で、こういう情報が付け加わる時、こう判断する傾向にあるという現象の記述や法則性の発見を目指しているではありません。むしろ、すでに人間はそういう信念改訂を現実に行っているものであり、その改訂の実践がどういったメカニズムに基づいているのかを、完全に一般的な仕方でも説明する、ということがこの理論の目的なのです。

第二に、この理論が心理学ではないということに関係するのですが、少なくともこの信念改訂理論は人間の合理性の一局面を示す理論でもある、ということです。人間が、様々な情報の流れの中におかれるとき、そうした情報の一々を受動的に受け容れるのではなく、取捨選択し、自らの信念を矛盾なしに保とうとする。これは、人間というエージェントの合理的側面にほかならないのですから、この側面を理論化する試みは合理性概念の理論化の一局面だと言えるでしょう。

では、こうした理論化によっていったいどういうことがわかるのでしょうか。一つの御利益は、こうした合理的活動に形式的な表現を与えることができることです。例えば、これまでの信念と矛盾する情報が与えられたときに、整合性を確保するためにできるだけ少ない改訂を選ぶ、ということがあります。こうした、信念改訂の最小性という制約に形式的な表現を与えることができます。また、信念の縮小、信念の保持、信念の改訂、そして信念の拡大といった信念のダイナミズムを統一的な観点から描けるというのも一つの特徴であります。

しかしながら、この信念改訂の理論には大きな問題点があります。それは、信念に矛盾が生じたとき、どの信念をキャンセルするかを決定するためには、個々の信念の重みづけが必要に

なる、という点です²。従来の信念改訂理論では、この問題を解決するために、適当な効用関数を決めるといった方法を探ってきました。これは、信念改訂の主体に外部から一定の合理性を付与することにほかなりません。もし信念改訂理論を合理性の一面の表現と考えるならば、これはほとんど循環的な論法を採っていることとなります。複雑系の理論との関わりが生じてくるのはまさにこの点においてです。人間がどの情報や信念に重きをおき、どの信念を他のものよりも軽く扱うか（つまり、容易に改訂可能と見るか）ということに関して、これが個人において完全にランダムだとは考えられない。例えば、多くの人に共有されている信念は、個人的な信念よりも信頼性が高く、矛盾した情報が生じたときにも共有信念の方はキャンセルしない傾向にある、というようなことはあるかもしれません。しかし、最初に与えられた重みづけですべてが決まるといような理論は、信念改訂理論としては不十分です。状況に応じて重みづけは変化するものでなければならないし、そこに前もって合理性を仮定してもいけない。この点で、複雑系経済学でのシミュレーション技法を信念改訂理論に転用する余地が生じてきます。その具体的手法をここで示すことはできませんが、ポイントだけを述べると、こうなります。どういう信念を動かしようのないものとして重視するかは、その社会がどういう社会であるかによって違ってきます。そこで、信念の重みづけの（少なくとも一部を）その社会自体の中で生成させることはできないか、そういう発想です³。

次にもう一つの話題を紹介したいと思います。それは言葉の意味とコミュニケーションの問題にかかわります。最初に「意味」について、「文の字義通りの意味」と「話者の意味」とを区別するところから話を始めます。この相違を「ドアが開いているよ」という発話の例で説明しましょう。まず、話者と聞き手が何らかの理由で険悪な関係になり、そのような状況で話者が「ドアが開いているよ」と皮肉っぽい調子で言う場合。次に、家の外がひどい天気で、話者が何か手の離せない仕事に従事しており、手持ちぶさたの聞き手に向かって「ドアが開いているよ」と言う場合。これらいずれの場合にも、「ドアが開いているよ」という文そのものは、同じ意味をもっていると考えられます。この文を単なる記述と見た場合、もしドアが開いていれば、その文は真であり、開いていなければ、その文は偽になります。だから、真偽という観

² 「重みづけ」という言い方はわかりにくいかもしれません。われわれのもつ信念は、すべてが同等な信頼性をもっているわけではない、という点にポイントがあります。例えば、ある人は、「すべての鳥が飛ぶ」ということを動かしようのない事実と捉え、それに対し「フェイダーが鳥である」という信念の方を比較的誤りやすいものとするかもしれません。別の人は、その逆に、前者にはあまり重きをおかず、後者を重要視するかもしれません。このようにどの信念を動かしようのないものとするかをここでは「重みづけ」と呼んでいます。

³ 実際には、こういう発想での研究はまだ始まったばかりで、それほど具体的な成果が得られているわけではありません。しかし、科学社会学的な研究の一部として、科学における理論変化（これも信念改訂の一部にほかならない）を説明するモデルとしてマルチエージェント・システムを用いるような研究がちらほら現れ始めています。

点で見れば、いずれの場合にもこの文は同じ意味をもつと言ってよいでしょう。この「同じ意味」と言われているものが「字義通りの意味」です。一方、上のように状況を込みにして、話者の言わんとしていること、話者が言おうと意図していることを考えるならば、それぞれのケースで言われていることは異なっています。前者ならば、「出て行け」ということであり、後者ならば「ドアを閉めてくれ」という依頼になると考えられるからです。この、状況によって異なる意味が「話者の意味」と言われるものです。

さて、では、これら二つの意味のどちらが基本的なものと考えられるでしょうか。常識的には「字義通りの意味」が先に来ると考えられます。というのも、「字義通りの意味」＝社会的な規約がまずはあって、その社会的・言語的規約を習得することによって、われわれは言語の共同体に参加してゆく、というのが一般的な了解だからです。

ところが、ポール・グライスという哲学者は、それが逆であるという主張を行っています。彼の主張は、最初にあるのは「話者の意味」だけであり、話者の意味を何とか聞き手に理解させるというプロセスを通して——このプロセスだけがコミュニケーションにとって本質的に重要だと彼は考えるわけですが——意味の固定化が進み、その結果として固定した規約としての「字義通りの意味」が生成される、というものです。

このプロセスはこんな風に描けるかもしれません。例えば、旅人が通る道に蟻地獄があって、そこは危険だということがわかっているとします。これを旅人たちに知らせたいが、旅人たちは様々な言語をもっており、それを知らせたい人間との間に共通の言語がない、とします。では、この人はどうやってその危険を知らせるか。言葉で知らせるのは不可能なのですから、何か目印になるもの、そしてそれが危険であることを誰にでも察知できるような印を用意するしかありません。例えば、石を積み上げ、その上に×印を付けたり、髑髏を置いたりとか、いろいろ考えられます。それを見た旅人は、それが自然にできたものではないことはわかります。すると、旅人は、誰が何のためにそのようなことをやったのかを考えるでしょう。それをやった者に何らかの意図があったことを察知するわけです。目印を作った方は、同時に、自分の意図が旅人によって察知されることを意図します。旅人は、そのような意図の把握を通して、道の先にある危険を理解するようになるかもしれない。

もちろん、このようなコミュニケーションがいつでもうまく行くわけではありません。しかし、うまく目印を工夫してやれば、ある程度うまくいくかもしれない。ある場合には、そういう成功例が積み重なって、多くの旅人の間で、特定の危険を知らせる記号として共有されるようになるかもしれない。そうなったとき、それはいわば固定化し、規約的な意味をもつようになります。こうして成立した規約的な意味こそが「字義通りの意味」と言われるものなのだ、というのがグライスの見解です。

ここで注目したいのは、規約が通常は「とりきめ」とか「約束事」として理解させるのに対して、グライスの見方ではそのような「とりきめ」を行う場面は一切ないという点です。もし文字通りに規約を「とりきめ」と考えるならば、それはどこかで誰かが取り決めたのでなければなりません。しかし、言葉の意味についてそのようなとりきめの場面、長老たちの会議を想定することはナンセンス以外の何ものでもありません。信号の赤を停止と取り決めることは可能でしょう。その際にわれわれは言葉を用いて合意に達することができるからです。しかし、言葉の意味を取り決めるときに、少なくともそのもっとも基礎的な場面では、言葉を用いることはそもそも可能ではないはずですが、したがって、グライスの考察は、いわば規約という概念から「とりきめ」という成分を除去するような考察になっています。

ここで、次の点に注意を払いたいと思います。複雑系の社会理論では、一定の秩序が生成するのに、リーダーや指導的規則のようなものを一切仮定する必要がなかった。例えば、boidのようなシミュレーションでは、あれほど複雑な飛翔形態を示しながら、全体を導くリーダーは必要なかったのです。このことは、規約を生成できるような複雑系理論が可能ならば、そこでは「とりきめ」や「長老たちの会議」のような想定なしにそれが可能だ、ということを示します。その意味で、複雑系はグライスの考察のよいモデルを提供できるかもしれない。

それゆえ、以上の考察に見込みがあるならば、グライスの描くプロセスが「字義通りの意味」にまで到達できるのは偶然ではないか、という疑問は杞憂に過ぎないことになるでしょう。しかし、ここにはいくつかの問題があります。このようにして、ある記号が字義通りの意味を獲得するとしても、これによってわれわれの言語のような巨大な構造体がいかにして生まれるのかは説明できません。また、言語の規約性にも多くの側面があります。私としては、規約や規範の生成を複雑系的アイデアによってシュミレートするという方法がこの点でさらに何が言えるのかを明らかにしなくてはならない、と考えています。言語的なものそのものを創発するシステムを作ればよい、と言っているわけではありません。しかし、経済学でのモデルを見ると、そこに一定の規則の創発という現象が観察されます。では、規則が創発するための条件は何か。そういった事柄の理解が、同じ社会システムとしての言語共同体の理解に使えないはずがない。具体的な成果を得るためにはまだまだ先は長いのですが、これが複雑系研究を言語哲学に応用するための一つのプログラムになりうると考えています。

「複雑系社会学」の可能性

—— 相互行為論と社会システム論から ——

嶋根 克己

問題意識

1995年前後にアメリカのサンタフェから発せられた「複雑系」という考え方が、自然科学のみならず社会科学諸分野に与えた影響は大きかったが、社会学においてはパラダイム転換につながるほどの衝撃は呼び起こさなかった。E.モランやN.ルーマンなどの著名な社会学者たちは以前から「複雑さ」「複雑性」という用語を用いてきたが、サンタフェ発の複雑系ブームには接続しなかった。複雑系的思考に対する社会学者の冷淡な態度はどこに由来するのであろうか。また社会学は複雑系にどのような思考枠組みを提供しうるのであろうか。

拙論「社会学は創発特性問題を乗り越えたか」では、「複雑系的思考」は社会学にとって目新しい理論枠組みではなく、むしろ社会学が明らかにしようとしてきた問題設定そのものであることを述べた。その古典的アプローチのなかに、システムとしての社会とエージェントによる相互行為という複雑系的思考の中核となる発想が含まれていることについて述べ、複雑系思考と社会学の関係について考察した。以下ではその粗筋を追いながら、相互行為論とシステム論という社会学を代表する二つのアプローチを架橋しようとしたP.ブラウの社会的交換論を紹介して、そこから導かれる理論的な含意から、上記の問題設定を再考してみたい。

社会学と複雑系思考

「複雑系」思考は自然科学から社会科学、人文科学にいたるまで広い範囲にわたって考察が繰り返されているが、本論では当面「複雑系」思考を次のように要約して考察を進めることにしたい。

複雑系とは、複数の異質なエージェントからなるシステム（系）であり、相互作用することで個々の要素の単純な結合以上のふるまい、つまり創発特性を結果するもの、と規定しておくことにしよう。すなわち、①複数のエージェントからなるシステム、②相互作用の存在、③創発特性の存在、を複雑系に不可欠な3要件とし、こうした現象にたいするアプローチを「複雑系的思考」とする。本論で展開されるテーマのひとつは、社会学とは、①②を前提としながら③社会における創発特性、特に最も一般的な意味における「社会」はいかにして創発してくるのかという問題、を探求する学問領域でありつづけてきたということである。

社会システム論の展開

「社会学の第一世代」と呼ばれている二人の巨頭、H. スペンサーとA. コントは、進化論的な視点から社会の一般法則を導き出そうとしたことに加えて、生物のアナロジーを借りて社会を複雑な構造をもった社会有機体としてとらえようとしたことに共通点をもっている。「社会学の第二世代」に属するE. デュルケームはこうした発想をある時期まで受け継いでいた。社会の進歩を分業という観点からとらえようとしたデュルケームは、社会の構造変化を「環節社会」から「有機的社会」への移行として説明した。これはどこを輪切りにしても似たような構造を持っている単純な生物と、分化した器官を備えて統合的に機能させている高度な生物との対比で社会の進化を表そうとしたものである。こうした進化論的な社会観を「分業論パラダイム」と読んでおこう。しかしデュルケーム自身はやがて「分業論パラダイム」から離れ、後半生の著作ではむしろ循環論的な社会観に移行してしまう。

社会有機体説に起源を持つ社会理論を、サイバネティクスやホメオスタシスなどの生物学や生理学の概念を導入しながら、現代風に洗練して社会システム論として復活させたのはアメリカの社会学者T. パーソンズである。彼はシステムにおける基本的要素を、外部環境との「適応」(Adaptation)、「目的達成」(Goal-attainment)、「統合」(Integration)「形相維持」(pattern-maintenance および Latency)とし、それぞれの頭文字を取り「AGIL 図式」としたことはよく知られている。これらについて詳しく説明する紙幅はないが、一世を風靡した彼の社会システム論も彼の死と同時に、その理論的勢いを失ってしまう。

生物は構造化された器官が寄せ集まっただけでなく、そこに一回的な「生命」という創発的な現象が現れない限り生命体とみなすことはできない。同様に、社会をひとつの「生命体」として考えるとき、単に諸個人の集合ではなく、なんらかの創発的な特性が現れない限り、それを社会や集団と呼ぶことはできない。しかしながら社会有機体説やシステム論の論者たちはこの問題に十分気付いてきたものの、社会における創発特性を説得的に説明する理論を提出できていないように見受けられる。

社会的相互行為論のアプローチ

現代社会学におけるもうひとつのアプローチは、社会を複数のメンバーによる相互行為という観点から考えていこうとするものである。その源流の一人にG. ジンメルを挙げることに異論はあるまい。彼は心的相互作用という視点から人間関係の精密な描写をおこない、そこに複雑な人間関係の論理を見出そうとした。

同様の方法をエスノメソドロジーとして現代に復活させたのがE. ゴッフマンである。彼はパフォーマンス、役割距離などの概念を用いてさまざまな角度から社会的行為の分析をおこなっ

た。ひとつだけ例を挙げれば、ゲームはゲームとしての独自のルールとリアリティを持っている。しかしルールは決してリジットなものではなく、時によっては自在に変形されることもある。参加者がゲームを楽しむことができるのはそれらを主体的に尊重しているからに他ならない。そこには共通のルールの遵守という暗黙の了解が存在しているのである。

ジンメルやゴッフマンが社会的相互行為とそこに含まれる暗黙のルールについて述べるとき、他者はなぜそれに従うと前提されるのか。他者を信頼するに足ると考える根拠はどこにあるのか。この問題に答えるためには、相互行為の積み重ねが他者への「信頼」を創発特性として生み出すという根拠を示さねばならないように思われる。

社会的交換が醸成する信頼のシステム

拙論「社会学は創発特性問題を乗り越えたか」では、社会システム論と社会的相互行為論の統合の試みとしてN.ルーマンの社会理論にその可能性を示しておいた。本稿では、パーソンズを経由したルーマンとは別なアプローチ、すなわちむしろジンメルに近い社会的相互行為論の系譜で、「信頼」の発生を解き明かそうとしたP.ブラウの議論を、彼の『交換と権力』から紹介したい。

マリノフスキーやモースが展開した交換論を下敷きとしながらブラウは交換の基本原則を次のように定式化している。「他者Bに報酬となるサービスを供与する個人Aは、その他者Bに義務を負わせる。この義務を果たすためにはBはお返しとしてAに利益を提供しなければならない。」(Blau: [1964] 1974; p.81) ここでいうサービスとは贈り物などの財なども含まれるわけで、貨幣こそ介在しないがサービスや財が個人間で交換されるという社会的行為の内容は経済学的な行為主体と同一である。

しかしブラウは、経済的交換は社会的交換とその内容や結果において大きく異なっているという。まず経済的交換においては、サービスや財は貨幣と交換される。これは交換対象の質(貨幣)や量(価格)があらかじめ明示的に示されていることを意味している。一方社会的交換、たとえば相手からのクリスマスプレゼントに対して、何がどの程度提供されるかをあらかじめ予測することはできない。

つぎに交換の時期について考えてみよう。経済的交換の場合には、一般的にはサービスや財と引き換えに支払いが行われ交換が終了する。信用販売の場合にも決済の期限があらかじめ決められている。しかし社会的交換の場合には、相手からのサービスの提供、たとえば食事への招待、に対していつ返礼するかは返礼者の意思に任されている。また相手から受けた重大な恩義については、その返礼は特定の期間に限定されず、一生涯にわたって義務を返済しなければならない場合もある。

そして経済的交換の場合には、経済的な取引を確実なものにするために契約書を取り交わされ、それは個人を超えた拘束力を持っている。つまり、基本的に相手は信用できないという前提に立っているのである。しかし社会的交換においては、相手がどのような形で返礼するのか、またいつ返礼するのかについて何も確実なものがないにもかかわらず、交換関係が持続するのであるから、そこには相手との相互信頼が不可欠である。

表で示せば次のようになる。

	経済的交換	社会的交換
交換対象	貨幣（定額）	特定化されない量と質
交換の時期	限定的	不特定な将来
交換の前提と結果	相互不信（契約）と非人格性	相互信頼と信頼関係の強化

(Blau: [1964] 1974 から作成)

このように個人的な好意に基づく社会的交換は、それが諸個人の功利的な動機によって発せられたものであったとしても、結果的には社会的な信頼関係のシステムを生み出す、というのがブラウの社会的交換論の含意である。「交換過程は諸個人のセルフ・インタレストを活用して、その結果、分化した社会構造をつくりだす。そしてこの構造の内部において、集合体の利益のために個人的利益の若干を破棄するよう個人に要求する諸規範が発達する傾向がある。」(Blau: [1964] 1974; p.82)

相互行為論とシステム論の架橋というこれまでの議論にひきつけていうならば、諸個人間の相互行為の結果としてシステムが成立していく過程を、確証のない返礼に投企しあうエージェント間の相互信頼に、ブラウは求めたのである。

相互行為論とシステム論の狭間に「信頼」を置くという理論的戦略はルーマンのそれと近いのかもしれない (Luhman: [1973] 1990) が、本稿ではルーマンとの比較に立ち入ることはできない。ここでは社会的秩序の生成について論じた浜日出夫の議論を紹介しておくにとどめよう。ガーフィンケルのパーソンズ批判を整理しながら、彼は次のように述べている。「ガーフィンケルは、このように自己と他者のあいだの世界の同一性を想定することを『信頼』と呼んだ。ガーフィンケルによれば、社会秩序はその根底において『信頼』によって支えられているのであった。……共通価値もまた信頼によって支えられているということは、社会には基礎というものがないということ、社会はじつは底が抜けているということを意味している。というのも、信頼には、結局、客観的な保証はないからである。そしてこの底の抜けた社会において、われわれは暗闇の中で跳躍をつづけるほかはない」(浜: 1997; pp.102-103、傍点引用者) システム

論の系譜からも、相互行為論の系譜からも、社会を根底的に支えている「信頼」という現象がなぜ創発的に生じるのかについての決定的な説明はなされていないように思われる。

社会学と複雑系

社会学における二つの古典的なアプローチ、社会システム論と社会的相互行為論の系譜について整理してきた。この二つのアプローチの根本的な差異は、社会についての見方に由来している可能性がある。それは「ルビンの盃」に代表される一方の図柄に注目すると他方は認識できず、他方に視点を移すと一方が見えなくなる反転図形のように、根本的には認識論的な問題なのかもしれない。

しかし社会学者たちは両者を結ぶ「失われた環」の可能性を探り続けてきたのも事実である。本稿では、前著では扱うことのできなかつたP.ブラウの理論を借りながら、セルフ・インタレストから創発する「信頼」の問題として考察してきた。しかし「信頼」の根源をとらえようとしても、結局は「底の抜けた」議論になってしまうのである。

サンタフェ発の複雑系が社会科学にもたらしたインパクトのひとつは、一見複雑な現象も単純な数式にあてはめて何度も解析すれば、近似的な現象を計算によって作り出すことができる、という確信をもたらしたことにある。日本でも「ゲーム理論」などを基にしながら、社会現象の数学的な解析やモデリングを行おうとする試みはあるが、数理的なアプローチを行うこれらの研究者たちは、ことさら「複雑系」を名乗ろうとはしていないように思われる。その一方でモラン、パーソンズ、ルーマン、日本では吉田民人などの理論社会学者たちは、自然科学の発展動向をうけてあたらしいパラダイムを提案しようと試行錯誤しているが、彼らはコンピューター・シミュレーションによるモデルの構築に踏み出そうとはしない。社会学者たちは、サンタフェ発の複雑系社会理論に対して冷淡であり続けたのである。現在の複雑系社会理論の特徴のひとつとして、コンピューター・シミュレーションを含むとするならば、「社会学的複雑系理論」は、現在の複雑系科学とは一線を画していることになる。

ここまで複雑系の可能性について、やや否定的に述べすぎたようである。もともと社会学には固有の対象や理論があったわけではなく、初期の古典理論をみればわかるように、生物学、経済学、文化人類学、法学、心理学、歴史学などからの応用と総合で成り立ってきたようなものである。もし複雑系思考が、すべての事象にあてはまる一般理論であるとするならば、社会や人間にも応用可能なはずである。しかし目的と手段のはっきりしているゲームや経済的行為ではなく、感情や衝動など非合理的な要素を含んだすべての人間的行為を数理的な解析に載せるためには、社会学に応用するための道のりは遠いような気がする。なぜならば社会学は一方で人間の行為の必然性を解明しようとしながら、一方では決定論的な理解に対して常に懐疑的

であったからである。

文献一覧

Blau,P. [1964] 1974『交換と権力』、間場寿一他訳、新曜社

浜日出夫 1997『『共通価値』から『信頼』へ——秩序問題のパラダイム転換』駒井洋編『社会
知のフロンティア』新曜社

Luhman,N. [1973] 1990『信頼』、大庭健他訳、勁草書房

Morin,E. [1990] 1993『複雑系とはなにか』、古田幸男他訳、国文社

嶋根克己 2003「社会学は創発特性問題を乗り越えたか」吉田雅明編『複雑系社会理論の新地平』
専修大学出版局

※本稿は 2005 年 3 月 16 日北京日本学研究中心との合同研究会での報告、「『信頼』から『友好関係』へ
——相互行為と社会構造——」を一部修正して書き改めたものである。

〈編集後記〉

社会や人間関係は複雑な糸で結びつき、またそこには偶然のように見える外在的な要因も絡んでくる。本学の若手研究者たちの専門領域を超えた雑談——研究室で鍋を囲みながらの——から、社研叢書の一冊となる『複雑系社会理論の新地平』が生まれたのも、複雑な人間関係と偶然的要素の結果であった。北京での合宿研究会に合わせて日本学中心との合同研究会を開催するにあたって、やはりさまざまな人間関係の複合と偶然が作用している。これらを成り立たせているものは何か。それは報われないかもしれないというリスクを引き受けながら差し出される好意と、それに対する返礼という循環から生まれる「信頼」であると社会学者は答えるかもしれない。近隣諸国の信頼を裏切り続けるような政治指導者の言動とは別次元で、他国との友好関係を深めて生きたいものである。

それにしてもお約束した締切を守れない（守らない）執筆者に対する関係者の皆さまの我慢にも限界はあったでしょう。ご迷惑をおかけしました。 (K.S.)



研究会後の宴席で

神奈川県川崎市多摩区東三田 2 丁目 1 番 1 号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

(発行者) 柴田弘捷

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前 2-10-2 電話 (03)3404-2561
